る。

私は「せっかく日本に米たので日本人の友達がいっぱいほしい」と考えていた。しかし今は、「どうでもいい」と言う考えのほうが強い。私も今まで努力はしたのだがその努力はその時だけだった。だから今はあきらめるようになった。もちろんこれは日本にいる限りである。これは日本の民族性だと思うので、これを変えることは、なかなかできないと思う。しかし、外国人ともっと良いコミュニケーションをしたければ、この民族性は変えたほうが良いだろう。少なくとも若者たちは自分の考えていることと言うことが一致するべきである。これが定着したら私のように「日本人の友達なんてどうでもいい」と考え始める外国人は出なくなるでしょう。

名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/

'00 公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学談話会

〔後期〕

愛知大学車道校舎3号館3階332演習室

午後2時半～4時半

2000年

⑩9月16日(土)

「数学からみた言語」

河田　賢二（愛知大学経営学部助教授）

⑪10月14日(土)（2講義開講）

「学習文法とコーパス(2)」

塚本　倫久（愛知大学国際コミュニケーション学部助教授）

「明治時代と訳語―新しい訳語をめぐって―(6)」

加金　広真（愛知大学名誉教授）

⑫11月11日(土)（2講義開講）

「曹操の詩歌について」

矢田　博士（愛知大学経営学部助教授）

「『星の王子さま』を原文・翻訳対照で読む」

高橋　秀雄（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）

⑬12月9日(土)（2講義開講）

「大学における中国語教育の再検討」

安部　悟（愛知大学現代中国学部助教授）

「日韓、ことばと文化比較論（その一）―「人間関係性」という概念について―」

常石　茂望（愛知大学法学部教授）

2001年

⑭1月20日(土)（2講義開講）

「雪国のことば」

片岡邦好（愛知大学法学部助教授）

「大学における韓国・朝鮮語と中国語の教学の問題について」

陶山信男（愛知大学名誉教授）

〈編集後記〉

アジア特集を組んだところ、早速多数原稿を寄せていただいた。アジアには過去を重く引きずった問題が数多く存在することを改めて痛感した。

人間の歴史は、いわば争いの歴史である。そしてその争いが世界規模で行われたのが今世紀であった。世界の富を巡り２つの大戦が起こり、あるいは自由か平等かの理念を掲げて50年には朝鮮戦争がはじまった。そして東西の冷戦は91年まで続いた。

帝国主義日本がアジア諸国に与えたさまざまな災禍は、今なお人々を苦しませている。「旅人打鈴」は強制徴用された元従軍慰安婦の演ずる悲しい一人芝居が観客の大いなる同情を誘ったことを報告してくれる。小説『太白山脈』は、解放後すぐに分断された朝鮮半島での冷戦時代、理念の対立から同胞間で殺戮が行われていた事実を取り上げ、読書界の話題をさらっている。

独裁政治が民衆に不幸をもたらすことは明白である。不幸は人権抑圧にはじまる。アウン・ミン・ニュウ先生の国ミャンマーでは、本来民衆に奉仕するべき公務員・軍隊が民主選挙の結果を踏みにじって政権を奪い取り、アウン・サン・スー・チーさんらによる政権返還の要求を無視、居座り続けている。長い一党独裁時代のテロの不幸を乗り越え、２回目の「民選総統選挙」が行われた中華民国（台湾）は、独裁大国中華人民共和国の脅しを受けている。

冷戦は残され、アジアの政治危機は終わっていない。繁栄の利益を分かち合い、自由か平等かではなく、自由も平等も両腕いっぱいに抱え込んで破顔一笑するアジアが見られるのは、いつの時代であろうか。

（編者）

（名古屋語学教育研究室発行）